それゆけ！ 勇者様！

quartz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
それゆけ！　勇者様！

【Ｎコード】
Ｎ５９３９Ｃ

【作者名】
ｑｕａｒｔｚ

【あらすじ】
突然現れた幻聴に勇者様にされてしまった少年、浅羽悠斗。本当に現れる怪物。増える幻聴。何故か覚醒するクラスメート達。もう怪物に倒されるより、彼の理性が崩壊する方が早そうだ。でもまあ頑張れ勇者様！

幻聴と少年

《…わ……こ……え…す……》

先ほどから、頭の中で妙な声が聞こえる。
しかも、繰り返し繰り返し、同じ音がだんだんと大きくなっていく。

《…わ……こ…がき…え…すか……》

お陰で先ほどから頭痛だ。

《…わたし…こ…がきこえ…すか……》

んー頭痛薬、頭痛薬……っと。

あったあった。

あ、この頭痛薬使用期限切れてるし。

《…わたしのこえがきこえますか～？》

『聞こえません』

なんとなく、脳内で返事してみたり。
末期だ。早く薬飲もう。

もう、風邪薬でいっか。

《……え？　あ？　聞こえない？》

『聞こえない』

一回二カプセルか……

《…うー……どうしよう…まさか私の声が聞こえないなんて……予想外だよ……》

よし、じゃあ寝るか。

『おやすみー』

《…あ、お休みなさー……って！　ちょっとー！！》

頭痛が一層酷くなる。五月蝿い幻聴もあったもんだ。

《聞こえてるじゃない！　ばっちりしっかり聞こえてるじゃないの！！》

『いやいや、聞こえてないって』

《もう騙されないんだから！　そんな事言って聞こえてるんでしょ！？》

『……』

《……え？　本当に聞こえてないの？　本当に？》

『本当だってば』

《あ……ごめんなさい、なんか私……って聞こえてるでしょコレーーーーっ！！》

無視して寝よ。

《寝るなーーーっ！！！》

うざい。

泣き虫

《ねえねえ、起きてよ！　起きてってば！》

さっきから幻聴のせいで寝れないので、まあ、暇つぶしに自己紹介でもしておこうか。
俺の名前は浅羽悠斗（あさば・ゆうと）、そこそこの高校で学生生活を送る１７歳だ。

《起きてよー！　無視しないでよー！》

まあ、別段、何か変な特徴があるとか、頭のネジが飛んでるとか、そう言ったコメディー向けの設定は皆無なのだが、一通りの武術とサバイバルは経験しているので、やはり『普通』では無いのだろう。

《泣くよ！　これ以上無視されたら私泣くよ？　泣いちゃうよ？》

あと、ネットで色々やってるので、普通の奴よりは金持ちだ。
もっとも、特に趣味も無いし根が貧乏性なのか、持っていても使う機会に恵まれて無いので、あるだけ無意味である。

最近では、姉がたかりにくる時以外ロクに使わなくなっているせいか、預金通帳にはちょっと怖いくらい０が並んでいる。

まあ、自己紹介はこのくらいにするとして……

《私泣いたら凄いよ！　惚れるよ！？　それでも良いの？》

これ（幻聴）だ。
想像以上にうざい。ウザすぎる。

ぜってー惚れねーよ。つーかもう涙声じゃん。

《泣くよ！　私泣くからね！　良いね？　泣くよ？》

もう良いから勝手に泣いてろ。

《ひっ、ふっ、びっ》

マジで泣くんかい。

《びえーーーーーんっ！》

『うるせーーーーっ！』

こんなんに惚れる訳ねーだろ馬鹿が！

《うわわぁぁあん！　悠斗が無視するーーーっ！》

『分かった、相手してやるから、泣き、や、め』

あ、頭が割れそう……

《うぅ……本当？話し……ずっ……聞いて……ひっく……くれる？》

『聞きます、聞かして頂きます』

これ以上脳内で喚かれたら本当に死んでしまう。

根気負けした俺は、仕方なく脳内の幻聴に付き合う事にした。

《えへへ～……》

うわ、もう機嫌直ってやがる。

自分の幻聴ながら、呆れるほど調子が良い奴だ。

『で、何だよ話しって？』

《うん、私はね。君をスカウトしにきたの》

スカウト？

『お断りします。お帰り下さい』

《泣くよ？》

『ちっ……解ったよ、聞きゃ良いんだろ……』

自分の幻聴に良いようにされるなんて屈辱だ。

だが、はっきり言ってあの絶叫に耐える自信は無い。

『で、スカウトって何の仕事のスカウトだ？』

《よくぞ聞いてくれました！　アナタに頼みたいお仕事はず・ば・り・勇者様！！》

……

……

『……』

《……》

ふう……幻聴って本当に嫌になっちゃうな。
この現代社会で勇者もへったくれもあるかっつーの（笑）
何と戦うんだ？　北か？　あの北の国か？

《やってくれる？》

『誰がやるかーーーっ！！！』

｜｜｜｜｜
～数分後～
｜｜｜｜｜

《びえーー、びえーーーん！！》

う、う、うるせー！　マジうるせー！！
頭が……頭が割れ……ぐわあぁっ！！！

《うわーーーん！　えーーんえーーん！！》

『た……頼む……から、な、泣き止ん……で……』

《やーーー！！　勇者やってくれ…ひゃっくっ…くれるまでっ……
絶た…っ…絶対泣き止ま…ないっ…もん！　うぇーーーん！！》

あああああっ！！　頭割れるーーーっ！
孫悟空か俺はーーーっ！！
昔から……女の涙は武器って言うが……
凶器だこりゃ……マジ死ぬ……
《うぇ……ひゃっ、ひゃっく……》
よ……よし、少し弱まった。チャンスだ。
『ま、待て。話しあおうじゃないか。な？』
《すーーーー……》
い、息吸ってるーーーっ！！
『わ、解った！！　やる！　やります！　勇者やります！！』
《本当？》
『ほ、本当、本当。だからもう泣くな、頼むから泣くな。』
《…本当に本当？》
『……本当に本当』
《やりーーーい！！》
あああああ……承諾しちまった……

本当にもう、１７にもなって幻聴とか勇者とかね、かなり痛いんだけど……

《じゃあさ、これから悠斗には、勇者として頑張って貰うからね》

『……いや、んな事言われても、何するか分かんねーんだけど』

《大丈夫、光有るところに影が有り！　勇者ある所に魔物あり！
災厄は自ずと現れるよ！》

全然大丈夫じゃない！

『じゃあ何か？　俺魔物に襲われるんか！？』

《うん、そだよ》

『そだよじゃねえええぇぇぇっ！！』

そして俺は再度勇者の仕事を断り、深夜、嫌々仕事を承諾するまで、延々と泣き声に悩まされる羽目になるのだった……

目覚ましはジャンピングキック

「ゆう！おっきろー！」

「へぶっ！！」

肩に強烈な痛みが走り、半身が摩擦により急激に加熱、そして一瞬の浮遊感の後、落下。

目が覚めた時には、床の上だった。

「うっ……つつっ……ったま痛ぇ……」

何だか酷く頭が痛み、思考がはっきりしない。

悪夢を見た後のような、妙な後味の悪さが俺を支配していた。後、強烈なジャンピングキックを喰らった気がするが、多分これは夢じゃない。

「ゆう、お早う♪」

俺の視界が、急に薄暗くなる。

首だけ曲げて天井を見上げると、見慣れた顔がそこにあった。

「……ヒィ姉、何だよ朝っぱらから……」

俺の姉の一人、浅羽尋（あさば・ひろ）だ。通称ヒィ姉。

「朝ご飯作れ！」

子供みたいな事を口走るヒィ姉。こんなんでも１９の大学生というから驚きである。

「はいはい……ったく……」

「ご飯に味噌汁、あと納豆よ！　これなくして日本の朝は始まらないんだから！」

「そういう台詞は作れるようになってから言えよ」

台所に立ち、卵を溶く。

納豆を入れて納豆オムレツにする算段だ。

「むー！　ゆうは厳しいわね！」

枕を抱きながらベッドの上を転がり、頬を膨らませて抗議するヒィ姉。

何というか、本当に子供だ。

「こちとら頭が痛たいんだから。少し静かにしてくれ」

「ふーん」

《あんまり寝てないもんねぇ……私もちょっと眠い……》

「あー、そうだな。そういやあんまり寝てな……ぶっ！！！」

《勇者様、お早うございまーす♪》

一気に、まだ眠っていた記憶が覚醒する。
頭痛の訳、させられてしまった約束、そして、この幻聴の凶悪な泣き声。
出来れば無かった事にしてしまいたい数々の事実が、一気に押し寄せて来た。
『……』
とりあえず、無視。
出来れば、勘違いであって欲しい。そんな淡い期待を胸に、頑張って黙ってみた。
《お早うございまーす♪》
『……』
《……泣くよ？》
『お早うございまーす！』
《よろしい♪》
どうやら、夢では無かったらしい。
《早速、今日からお仕事始まるんで。よろしくねー♪》
卵焼きの焼ける音に混じって、やっぱり聞こえてくる幻聴。
『仕事って……ああ、あの魔物が出るとかいう……いや、つーか今

日学校だし』

善良なる一学生にとって、学業は神聖なる義務である。
いつもはうざったいだけだが、勇者業をボイコット出来る言い訳となるなら、むしろ有り難い。

《ああ、その点はご心配無く。ちゃんと学校に行って良いよ♪》

『ん？』

《その時になれば解るから。普段通り生活しといて♪》

『……ふーん』

とりあえず、軽く流しておく。
本当に分かるかどうかはともかく、今考えても無駄って事だ。
幻聴の言うとおり、本当に化けもんが現れると決まった訳でも無いし。

「よし、完成！」

幻聴に付き合ってる内に、朝食が完成した。

ご飯に味噌汁に納豆オムレツに冷や奴、魚が無いのが残念だが、まあ仕方ない。

「ヒィ姉、朝飯出来た……ん？」

「ぐぅ……ｚｚＺ」

寝てるし。しかも人のベッドで。

ふう……とりあえずここは……と。

ジャンピングキィィィック！！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5939c/

それゆけ！ 勇者様！

2010年10月12日00時54分発行